No.8　2014 年 10 月 31 日

第8号

特集「日本初の国境観光・対馬モデルの可能性を考える」

（福岡市天神電気ビルにて）

JIBSNレポート第8号の発刊によせて

第8号の特集として、2014年7月7日に開催されたシンポジウム「日本初の国境観光を創る：対馬の挑戦」についてまとめました。本シンポジウムの契機となったのは2013年12月14・15日にJIBSN、対馬市、JR九州高速船およびANAの協力のもと、JR九州旅行が企画募集して行われた福岡から対馬と釜山を一度に訪れる国境観光のモニターツアーです。このツアーを一過性に終わらせないために、そのフォローアップとして、モニターツアー関係者にこれからの可能性について意見交換することを目的に本シンポジウムを開催しました。その結果、対馬をはじめとする国境離島における観光振興の課題や「国境観光」の日本の他地域への応用可能性と課題に関する情報共有を行うことができました。セミナーにご参加いただいた皆様はもちろん、開催のためにご尽力いただいた関係者の皆様、特に会場をご提供いただいた島田龍様をはじめとする（公財）九州経済調査協会の皆様にはこの場を借りてお礼申し上げます。

なお、本セミナーを引き継ぐ形で開催された2014年10月のシンポジウム「日本初の国境観光を創る：北海道・稚内の挑戦」及び来る2014年11月に開催予定の「竹富セミナー」の模様もJIBSNレポートとしてまとめられる予定です。

（事業部会長 古川浩司）

プログラム

2014 年 7 月 7 日（月）　会場：福岡市天神・電気ビル共創館 3F カンファレンス C

13:30～14:00 基調報告　福岡発対馬経由釜山行きのモニターツアー実施

岩下 明裕（JIBSN 副代表幹事／北海道大学 スラブ・ユーラシア研究センター教授）

花松 泰倫（九州大学 持続可能な社会のための決断科学センター講師）

14:00～14:15 DVD 上映　国境の島・対馬の魅力　観光プロモーション

14:15～16:30 パネルディスカッション　日本初の国境観光：対馬モデルの可能性を考える

［コーディネーター］

薮野 祐三 （国境地域研究センター 理事長）

［パネリスト］

財部 能成（対馬市 市長／JIBSN 代表幹事）

川口　史（JR 九州高速船（株） 代表取締役社長）

伊豆 芳人（ANA セールス（株） 常勤顧問）

川口 幹子（(一社）MIT 専務理事／主任研究員）

江口　栄（(一社）対馬観光物産協会 会長）

主催：境界地域研究ネットワーク JAPAN

特定非営利活動法人国境地域研究センター

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター（境界研究ユニット）

協力： 対馬市　九州経済調査協会　九州大学アジア太平洋未来研究センター

九州大学持続可能な社会のための決断科学センター

後援： JR 九州高速船　ANA セールス　長崎新聞社　西日本新聞社　テレビ西日本

No.8　2014 年 10 月 31 日

国境観光（ボーダーツーリズム）のシンポジウムによせて

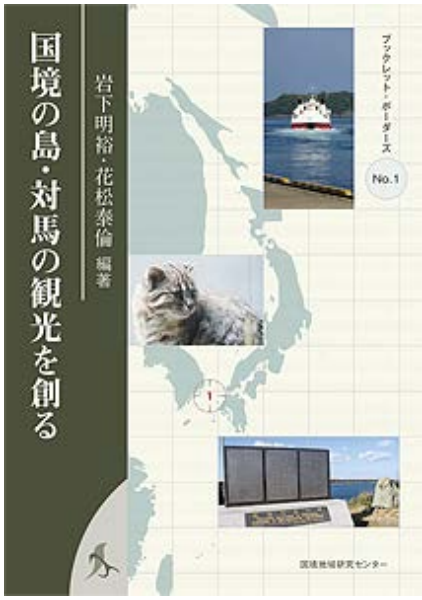
JIBSN は、国境地域研究センター及び北海道大学境界研究ユニットとの共催で、このシンポジウム「日本初の国境観光・対馬モデルの可能性を考える」を開催しました。実施に当たってはJIBSN メンバーでもある九州経済調査協会が強いイニシアチブを発揮してくださいました。地域の観光をテーマに掲げたこともあり、旅行業、メディアを含む多くの民間団体の方々にお世話になりました。改めてお礼申し上げます。

本シンポジウムは、国境観光（ボーダーツーリズム）という言葉がまだ日本でなじみのないこともあり、岩下明裕が基調報告としてボーダーツーリズムの世界的な事例と意味を紹介しました。これ続き事業部会員としてこれを担当する花松泰倫が対馬の現況を整理し、国境観光をいかに対馬でプロデュースできるか、どのように地域振興につながるかという観点から報告しました。境界研究ユニットと国境地域研究センターが制作した対馬の国境観光プロモーションDVDの上映を挟み、シンポジウムはパネルディスカッションへと続きました。本レポートではその討論部分をライブのかたちでまとめていますが、基調報告及びDVDに関心をお持ちの方は、ぜひ国境地域研究センターから刊行されている、『国境の島・対馬の観光を創る』（岩下明裕・花松泰倫編　北海道大学出版会）を一読ください。下記の関連サイトもご覧いただければ幸いです。

http://src-hokudai-ac.jp/jibsn/report/20140707.pdf

http://borderlands.or.jp/seika/seika.html

JIBSNは国境観光をキーワードに、八重山・台湾、稚内・サハリンなど南と北の国境地域の交流と振興もプロデュースしようとしています。10月2日にはシンポジウム「日本初の国境観光を創る・稚内の挑戦」が札幌で開催され、こちらは130名が参加し、熱い議論が行われました。その模様につきましても、本レポートでお届けする計画です。　（岩下明裕）



No.8　2014 年 10 月 31 日

パネルディスカッション
「日本初の国境観光：対馬モデルの可能性を考える」

【コーディネーター】

薮野 祐三（特定非営利活動法人 国境地域研究センター 理事長）

【パネリスト】

財部 能成（対馬市長／JIBSN 代表幹事）

川口 史（JR 九州高速船株式会社 代表取締役社長）

伊豆 芳人（ANA セールス株式会社 常勤顧問）

川口 幹子（一般社団法人 MIT 専務理事／主任研究員）

江口 栄（一般社団法人 対馬観光物産協会 会長）

【司会】

島田 龍（公益財団法人 九州経済調査協会 調査研究部研究主査）

（島田龍）本日の進行を務めている公益財団法人九州経済調査協会の島田です。これからシンポジウムに入りますので、司会の薮野祐三先生よろしくお願いいたします。

（薮野祐三）お待たせしました。それではシンポジウムに入ります。私はシンポジウムのコーディネーターを務めさせていただきます、特定非営利活動法人国境地域研究センター理事長の薮野祐三です。どちらかというとこれから勉強しなければならないのですが、年の功ということで、コーディネーターを務めます。

それではご登壇いただいております方々を最初に紹介させていただきます。お隣が対馬市長の財部能成さん、それからお隣が JR 九州高速船株式会社社長の川口史さん、その次が ANA のセールス株式会社常勤顧問の伊豆芳人さん、それから一般社団法人 MIT 専務理事の川口幹子さん、最後に対馬観光物産協会会長の江口栄さんという順にお話をしていただきます。予定は 2 時間で少し長いですが、4 時半になりましたら、途中、お話が終わってない方がおられましても終わりますので、ぜひ最後までお付き合いいただければと思います。今日はお 1 方につき、3 つのお話をしていただくようにお願いしてあります。最初はいわゆる対馬の「国境観光」に対して、各団体の取り組みをどう思うのか、2 番目は今まで考えてきた失敗例を含む事例紹介、そして 3 度目は将来的にどういう展望があるのかを中心にお話をしていただきたいとお願いしています。

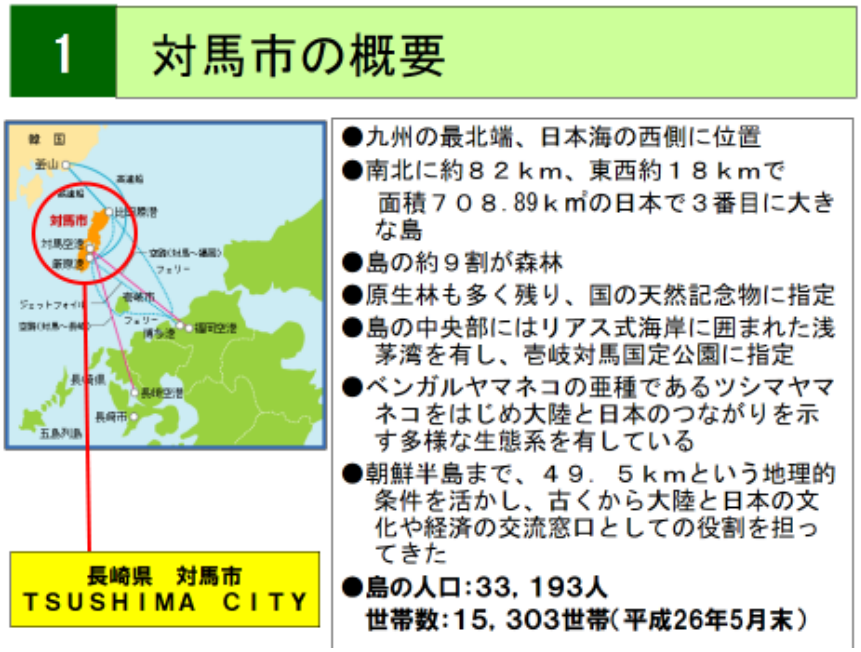
それでは早速ですが、まず 1 人 5 分でお願いしていますけれども、対馬の状況を全体としてお話をしていただくということで、財部市長については 10 分間お願いします。それではよろしくお願いします。

（財部能成）ただ今、紹介をいただきました対馬市長の財部です。皆様方が心配している部分とか、まったく心配してない部分も含め、きちんと伝えていければと思っています。対馬といいますと、どうしても壱岐・対馬という 2 つの島を連ねて、ほとんどの方がイメージされるのですけど、壱岐と対馬は明らかに距離も離れておりますので、「違いまっせ」ときちんと伝えたいと思っています。

対馬は日本では 3 番目に大きな島になっています。南北が 82 キロ、東西 18 キロ、覚えるのは簡単です。足せば 100 です。そういうふうに覚えていただければいいと思います。この島は 89%が森です。この森がはぐくんだ海というので、私ども水産業というのがしっかり今まで根付いてきて、なりわいはそこを中心としてやってきております。先ほど言いました森については手付かずの原生林も多いです。国道、県道から歩いて 5 分ぐらいで原生林に着きますので、「原生林がそんな近くにあっていいのか」と言われたこともありますが、あるのです。対馬はそのような島だと思ってください。

その森の中には、誰よりも一番有名なツシマヤマネコが 80 頭から 100 頭います。財部は 1 人しかいないのに、こちらの方が希少だと言われています（笑）。当然ですが、そのツシマヤマネコが生物の多様性という部分において、すごく大切な生き物であると私どもは象徴的に思って扱っ

ていますし、それ以外の動物、植物も大切にしていかなくてはこれからいけないねということで、市民を挙げて今取り組みをさせていただいております。



そういう中、この対馬の北端、北西からこちらまで、49.5 キロで外国です。おそらく 2000 年前からこの距離は変わっていないと思います。ちなみに南側に厳原港がありまして、北側に比田勝港という港湾がございます。厳原港は重要港湾という、重要が付く明治時代からの開港です。この厳原港から福岡までの距離は約 130 キロございます。先ほど言いましたこちらは 49.5 キロです。ジェットフォイルに乗れば 1 時間 10 分で釜山に着いてしまいます。今日は飛行機が飛ばなかったものですから、ジェットフォイルで壱岐を経由して来たのですが、その場合は 2 時間かかるというのが対馬の今置かれている状況です。

その中に現時点では 3 万 3,000 人程度しか住んでいません。日本中、どこも一緒ですけれども、50 年前は 7 万人近くの人口だったのが、半減しています。

先ほど岩下先生、花松さんの紹介の中で浅茅（あそう）湾という、リアス式の海岸の話がありました。ここは間違いなく絶景です。しかしなかなかその絶景を対馬の人が分からないまま過ごしていると思われてなりません。それ以外にもこれは 5 月に咲き誇るヒトツバタゴです。ナンジャモンジャとも言いますし、私どもの地区ではナタオラシという表現もあります、5 月に咲く大陸系の植物です。これは一枚岩の白岳というところですし、秋になりますと紅葉も立派なものです。

そしてこの下の生き物関係ですが、これについては、私は正直言って得意ではありません。子供のときにサンショウウオを捕っていましたが、あんまりこんな連中と会ったことがないものですから。「今こんなのが実際にいます」と教えられて、「希少な島だ」と私もずっと感じます。

テンはこんな色ですが、冬になりますと真っ白のかわいいやつですが、残念なことに、道路に出てきてというようなこともやっぱりあります。それもお許しいただかないといかんのかなと思っています。そうじゃないと生活が私どもはできんわねと思う部分もあります。

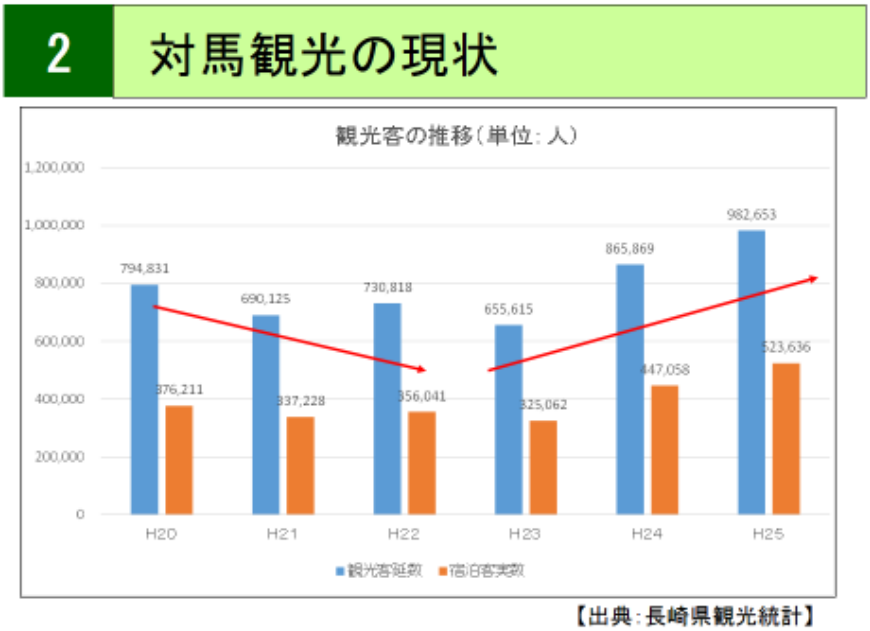
先ほど森が深いという話をしましたが、原生林があり、ヤマネコが田んぼの畔（あぜ）にいるところです。よくヤマネコと言うと山の中だけにいるみたいに感じられますが、どうもみんなの話を聞くとタネコ（田んぼのネコ）という言い方をされている節がありますが、そういう畔で撮られたヤマネコです。

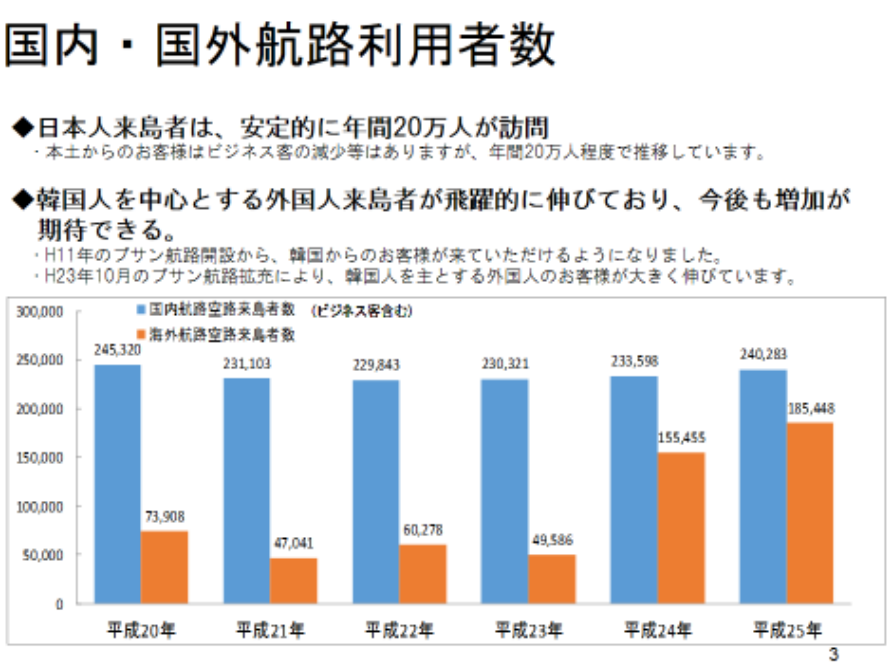
ほとんどが大陸とのつながりの中で 10 万年前あたりからの希少な生物が残ってきています。よくよく考えますと、私どももこいつらが生きているから、僕らもこの地で辛うじて生かしてもらっているのだろうという思いもありますし、この自然を失ったときに僕らはどんなふうにして生きていけるのだろうという思いを持ちながら生活をしています。

そういう中、対馬の観光という面でお話ししますと、新聞でも韓国からのお客さんが一気に減ったよねとか最近よく言われますが、対馬だけはずっと増え続けているという事実があります。というのも 49.5 キロしかなくて、福岡の方が私どもの対馬に「来たい、来たい」という強い気持ちを持っていても、いかんせん、約 130 キロもあって価格も高いです。釜山から来る方が明らかに安いです。だから釜山の人たちも気軽にやってきています。

これは宿泊客の実数でして、延べ人数にしても、やはり平成 22（2010）年ぐらいから逆に回復傾向に入っているところです。それと対馬といいますと、十数年前からずっと韓国からのお客さんが来ています。ここ最近は急激に伸びて、平成 25（2013）年は 18 万 5,000 人という数字を記録しています。今年もセウォル号の関係もありますが、おそらく 18 万人、もしかすると 20 万人ぐらいまでいくのではないかという状況です。それで引き替え、国内からの方たちは 23～24 万

人でずっと同じという状況です。

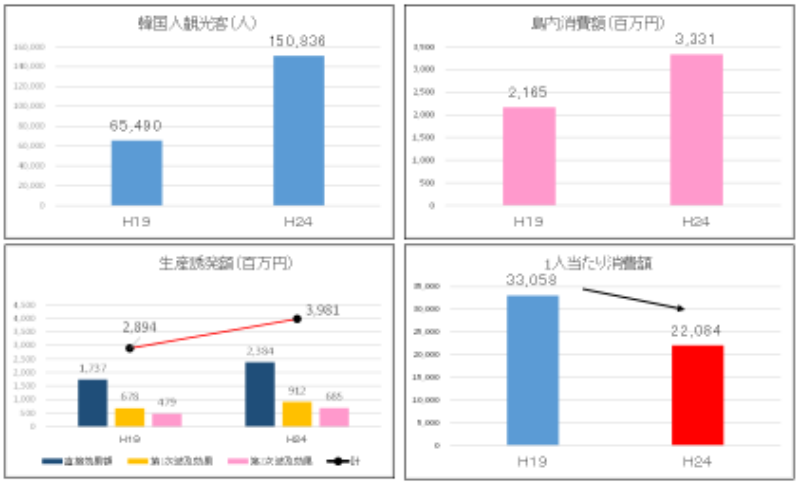




また「韓国人観光客がもたらすもので、どういう経済効果がありますか」とよく言われますが、平成 24（2012）年で 33 億円ぐらいしかありません。1 人当たりの消費額が逆に落ち込んでいます。「それはなぜだろう」と私どもも考えたのですが、少なくとも「落としたいと思っても落とす」…先ほどの対馬ツアーもそうですが、お土産やおもてなしの部分が足りないということもまだま

だあります。そして「宿泊する施設の整備が特に比田勝という北部の地域において不足をしていることによって観光消費額が入り込み客数に対して少ない」という結論に私どもは至っています。

韓国人観光客の島内消費額



【平成19年度は長崎県、平成24年度は対馬市の独自調査により算定】

観光客、島内消費額、生産誘発額（経済波及効果）共に増加しているものの1人当たり消費額は、減少傾向にある。

上記要因を検証した今後の取組みとしては

魅力ある土産品や購入意欲の湧く地場産品の開発、また、島内においてバランスの取れた購入店舗の配置や一定の品数の揃った店舗の増加が必要。また、宿泊することで観光客の消費額は格段に増加することが予想されるため、宿泊施設の整備（特に北部地域）は急務といえる。

対馬の現状についてはそのような状況です。またご質問もたくさんあるでしょうから、おいおい答えさせていただきます。

（薮野）どうもありがとうございました。それでは次に JR 九州高速船の川口さん、よろしくお願いします。

（川口史）はい。「航路の現状とビートルの役割を 5 分間しゃべってください」というご指示をいただいております。私はビートルを造る前後におりまして、それから約 20 年ぶりに昨年帰ってきた人間ですが、最初になぜ JR 九州がこういうことをしているのかを簡単にご紹介します。

昭和 62（1987）年に国鉄が分割民営化されました。私は当時 30 歳だったのですが、「何か九州でしかできないような JR の事業を考えよう」と言われたときに、はたと思ったのが外国に一番近い JR であるということです。そう考えると私は博多生まれですけれども、九州が繁栄したのは……博多商人のおかげ、あるいは博多ではないですが新日鐵ができた、稲作の一番古い遺跡がある、対明勘合貿易、遣唐使……これらを並べていくと全部外国との関係なのです。私は断言しますが、外国との関係以外で九州、博多が栄えたことはないと思います。

そう考えると外国に近いのは大変意義があると考え、1 回釜山に行きました。行きは飛行機で、帰りは船でしたけれども、行きは本当に飛んでいる時間は 30 分ばかりで、とんでもない大きな街が近くにありましたが、当時は観光の交流はございませんでした。在日の方をはじめ、いろいろいらっしゃるのは知っていましたし、観光交流や経済交流は若干はあったのかもしれませんが、そんな大きなものは感じられませんでした。

それで「ここをつなげば大きな人の流れ、物の流れができる」と思って造ったのがビートルです。最初は本当にお客様が少なくて、乗組員よりもお客様が少なくて走っているという状況もあったのですが、お客様が増えてきて、最初の年は 4.6 万人だったのですが、一番多かったのは 2010 年で 46 万人運ばせていただきました。昨今は大震災や竹島問題等でどんどん減って、去年の実績が 31 万人ぐらいですが、特に観光というのは絶対そこに行かなければいけない用事ではございません。「時間とお金をどこで使おうか」というのが観光だと思いますが、今の日韓関係により、日本人は韓国にあまり行きたくないという状況で、大変厳しい状況になっています。

二十数年、この事業に JR としては付き合ってきましたが、本当にお国柄が違うので、なかなか難しい問題はビジネス上も起こってまいりました。けれども、よく韓国の方と付き合っていると、何だかんだ言うけれども、「日本が近くにあるから今の韓国があるよね」と言ってくれますし、さっきも申し上げたように今の九州があるのも、やはり韓国があった、あるいはその周辺のアジア諸国があったから九州があるのです。500 年たっても 1,000 年たってもこの関係は変わらないだろうから、今までもいい時代、悪い時代があったでしょうけれども、日韓の交流を促進していくのは大変意義があることで、JR 九州として、今は赤字で困っていますが、ぜひ黒字に持ち込んで日韓の経済交流あるいはその間にある対馬の観光交流の繁栄に何らかのお役に立てればと思いながら仕事をしているところです。今後ともよろしくお願いします。

（**薮野**）どうもありがとうございました。それでは次に ANA セールスの伊豆さん、よろしくお願いします。

（**伊豆芳人**）ANA セールスの伊豆と申します。どうぞよろしくお願いします。私の方からは旅行会社が対馬とか、あるいは国境観光に今どう取り組んでいるかという話をしてくださいということなので、簡単にお話をいたします。

まず全日空が今、福岡～対馬を飛ばせていただいています。だいたい 1 日 4 往復から 5 往復ぐらい毎日飛んでいるのですけれども、昨年 1 年間の福岡～対馬は 19 万席のお客様にご利用いただいています。19 万席ですと、1 日だいたい 520 名が福岡～対馬を往復しているということですが、利用率で申し上げますと年間平均 52%です。全日空の国内線全体の平均が 62%ですので、全体よりも 10%ぐらい低いというのが、福岡～対馬の路線状況になります。その 19 万席の中で例えば私ども、大手の JTB やとか近畿日本ツーリスト、こちらですと西鉄旅行といった旅行会社が例えば団体旅行やパッケージツアーで福岡～対馬線を利用したシェアが 19 万席のうちの 5%です。ですから、1 万席に満たないということで、実はこのシェアも全日空の国内線の平均が 35%ですので、福岡～対馬はどちらかというとビジネスや生活路線に密接な意味合いが強くて、なかなか旅行商品でご利用いただくのは少ない現状になっています。

これは旅行商品を我々が作らないから伸びないのか、なかなかご利用が少ないから作らないの

か、いろいろとその辺は分からないですけれども、実際のところ数が少ないということは、皆さんのお手元にはご用意できてないですが、パンフレットを作るのもお金が掛かって、私どもはこういうパンフレットを作ったりしているが、パンフレットを作る費用が回収できないと、旅行会社は旅行商品を作るのに少し手をこまねいてしまうというのが今の現実だと思います。

従って対馬だけでもそういう状況ですので、対馬＋韓国のようなチャレンジングな商品は、なかなか旅行会社は手を出していないのが今の実情です。例えばほかにも稚内とサハリンとか、あるいは与那国と台湾という組み合わせも、私の知る限りでは、旅行マーケットにたぶん存在してないと思いますので、その辺のことはまた後ほどお話しするところもあると思いますが、今の旅行会社ではそういう現状です。

旅行会社の現状及び旅行会社が抱えている課題も含めてお話をすると、皆様も旅行会社のカウンターをお使いになると思いますが、ほとんどの旅行会社が国内旅行と海外旅行とにブースが分かれています。従って「対馬と韓国」のような国内海外融合型のパンフレットを作っても、非常にくだらないと言われるかもしれませんけど、国内でも海外でもないので置く場所がないということがあります。

それからホームページもどちらかというと縦割りで、国内と海外旅行が分かれていますので、両方行くような商品のコンテンツを置いておく場所が今はありません。それからこれは結構大きな問題ですが、海外旅行と国内旅行でコンピューターのシステムが全然違うのです。従って両方使うことになると非常に手間がかかり、両方使える社員が旅行会社ではなかなかいません。これらが今の現実的な課題であると感じています。

もう 1 つは、実は「国境観光」という言葉を今回このシンポジウムに呼んでいただく際に初めて知りました。たぶん旅行会社の社員も今まで「国境観光」という意識を持つ機会がなかったと言いながらも、そういう旅行商品を作る人間が国境観光というコンセプトを持っていたかというと、非常に希薄で、もしかしたら「国境エリアを売っていくのだ」というようなコンセプトをもっと強く意識して旅行をつくれば、別の商品がこれから生まれてくる可能性は非常に多いのではないかと感じています。旅行会社の今言ったような現状です。

（薮野）どうもありがとうございました。国内旅行、国際旅行の 2 つでしたら、国際旅行に仕分けをここでしていただいて、国境旅行という形を付けていただくのが一番早いのではないかと思います。というのは、対馬と同時に釜山も、私は大好きな街で、何度も行きましたが、ぜひ対馬に行けば釜山にも行っていただたいのです。韓国料理はおいしいですし、ぜひパッケージとして、国際旅行としてお願いします。それでは川口幹子さん、よろしくお願いします。

（川口幹子）皆さん、こんにちは。私がなぜここにいるのかというのは、いまだに私も分からなくて、対馬市長、ANA セールス、JR 九州、そして対馬観光物産協会という名だたる面々の中に「一般社団法人 MIT とはいったい何ぞや」ということをこのコーナーで話してほしいということ

でしたので、まず私の自己紹介からさせていただきます。

私は対馬出身の人間ではないのです。私自身は、実は青森県青森市の出身で、3 年前に対馬に移住しました。なぜ青森から対馬に来たのかということですが、総務省が過疎に悩む地域に対してこれまでは公共事業の誘致に予算を付けていたのを、人を派遣しようということになったからです。都市部も含めいろいろな経験をした人が過疎に悩む地域に行って、そこでいろいろな発見をして、地域おこしを専門に担う人を派遣しようという制度をつくったのです。

その一環で、対馬市長が「対馬はやっぱり生物が独特で、非常に豊かな自然、非常に豊かな生態系があるので、これを生かした地域づくりをしよう」ということで、生態学や自然について学んだ人を雇いたいということになったわけです。それで私が 3 年前に島おこし協働隊という制度で移住してきたわけですが、3 年間、対馬市の臨時職員のような形で、対馬の自然、文化、歴史などを学ばせていただきながら、どうやって地域づくりに生かしたらいいのかをいろいろ考えてきました。

先ほどの市長の概要説明の中にもありましたが、対馬は自然が豊かで生態系が独特です。私は生物多様性保全担当として、その自然を生かして、どう産業振興につなげるかということを考えてきたのですが、お手本になるのは屋久島や西表といった島々で、エコツーリズムというきちんとした産業が確立しています。けれども、対馬はこれだけ豊かな自然があるのにもかかわらず、そういうエコツーリズムをやる団体や法人が 1 つもないのです。

先ほどの DVD や花松先生のお話にもありましたが、対馬はかなりマニアックな島で、見るだけで解説がないと何を楽しんでいいか分からないところもあるのです。そこを何とかきちんと伝える体制、ゆっくり島で学んでいただく体制をつくる必要があるのではないかということで、去年、一般社団法人 MIT を立ち上げました。

この MIT は「MIT」と書きますが、マサチューセッツ工科大学ではありません。「社名がどうして MIT なのですか」とよく聞かれますが、地域の資源や地域の魅力を見つける、そしてそれを活かして後世なり、いろいろな人たちにつないでいきたいという「みつける・いかす・つなぐ」という頭文字を取って MIT で、実は日本語なのです。

ということで、国境観光は今まで概念になかったもので、新たな発想として今日いろいろ勉強させていただきますが、私たちが伝えたい対馬は、豊かな自然や豊かな文化が、人の暮らしの中で培われてきた長い歴史の中、人と自然がうまく付き合うことによって形成されてきた風景や文化です。そういう理念を持って、何とか着地型観光を推進していこうと活動しています。

非常に簡単ですが、これで MIT の概要説明を終わります。

（薮野） どうもありがとうございました。マサチューセッツ工科大学かと思っていたのですが、そうではなかったのですね（笑）。　対馬の魅力はずいぶんよく分かってきましたので、また次の補足もよろしくお願いします。

それでは江口栄さん、最後になりましたが、よろしくお願いいたします。

（**江口栄**）一般社団法人対馬観光物産協会の江口と申します。まず今日は「国境観光・対馬モデル」ということで、皆さんに対馬にスポットライトを当てていただいたことにお礼を言います。今までが壱岐・対馬という格好で必ず 2 島を巡る旅行商品が多く、壱岐に泊まって対馬を素通りして博多に帰るという寂しい観光の現状があったものですから。

ただ国内観光としてはバブルの頃は団体旅行が主体で、宿泊設備も今の倍以上あったわけですが、バブル崩壊以後、旅館もだいぶつぶれてしまって、今は厳原町に 10 軒、ほかの 5 町で 12～13 軒、あとは民宿を含めて何とか 2,300 人ぐらいは対馬の中で宿泊できる客数を確保しているわけですが、近年、韓国のお客さんが 1 で 18 万人を超えるような状態で、春や夏といった繁盛期のときにはどうしても宿泊施設が不足しています。それにもってホテルが老朽化して、新しいホテルでもだいたい 20 年前にできたホテルが 4 軒ぐらいです。

そんな老朽化もあるわけですが、観光客だけではなくて、日本人観光客のニーズにも対応できていないのではないかとみんなで話はしているわけです。ただ、インフラは量、質、共にまだまだ不足しているというのが現状です。ただ、バスは、昔は対馬交通 1 社だけだったのですが、韓国人の急増もあり、今は 7 社で、バスの台数も 70 台ぐらいあります。

だから旅館に比べると運輸の方は何とか今のところ足りています。飲食店もだいぶ数は減ってきた状態です。けれども数が減ってきても、その分みんながいつも 100%入るかといったらそうでもなくて、その点が寂しい現状です。皆さんにもまたいろいろお願いしないといけないかもしれないですが、韓国人の現状として、ごみ問題やマナー……物を持っていくような悪さをする韓国のお客さんは減ってきたわけですが、韓国人独特の大きな声でホテルのフロントで夜も寝ずに焼酎を飲んで、わあわあ騒ぐ……このマナーと山にごみを落としていくことが徐々になくなっていけば、またいい韓国と日本の付き合いができていくのではないかと思っています。

まだ 2 つ目、3 つ目がありますから、またその点は後でお話ししたいと思っていますが、だいたい島に来られる日本人は食事やショッピングを期待されていますが、韓国のお客様はどうしても登山とか歴史、景観、釣り……釣りに関してはほとんどお金を惜しまないです、それ以外では「安く、安く」と言いますが、釣りのお客様は本当に日本人以上にお金を使われる人が多くて、意外と釣って持って帰られる人も多いです。

それと旅館に泊まられなくて帰られる人、日帰りをされるのに釜山港を出るときに釜山港の免税店で買い物をされます。釜山で注文した商品を持って帰られるというのは、要するに 5,000 円程度の安い料金で釜山と対馬間が往復できるものですから、要するに洋酒であり、バッグであり、釜山の方である程度欲しい商品を買われて帰られるということです。

時間になりましたので、また後ほど、失礼します。

（**薮野**）どうもありがとうございました。韓国の方には失礼ですが、夜中まで大きな声で騒がれることを、私も経験することもありますが、日本人も一昔前はアメリカに行って同じことをやっ

ていました。ですから、ある程度、時間差で、それはまた我々それを共有していかなければいけませんが、なかなかいい話をお聞きすることができたと思います。

それでは、第 2 ラウンドに入っていきます。第 2 ラウンドは、今までの活動の中で、「これは当たった、これは失敗した」といった経験談をお話しいただければありがたいのですが、あるいは言い残したことはありますか。

（川口史）すみません。ビートルが対馬の航路にどういう思いでやっているのかという話です。また、少し昔の話をさせていただくと、本当に当初はお客さんが少なかったわけですが、お客様を少しでも増やしたいと思って、対馬に寄らせていただきました。当時これは臨時寄港とか、場合によってはチャーターでやったこともありますが、毎年何年も続けて使っていただいたのは豊玉高校さんの修学旅行です。釜山の方に行っていただいて、そういう寄り方を始めました。

そうしますと、私どものパートナー、ご存じの方がここにもいらっしゃるかもしれませんけれども、キム・キョンヒ（金景熙）さん（故人）という釜山の観光協会長と旅行会社の会長をされていた方が、「川口さん、対馬に船が行ったら韓国の釜山の人間は行きたいんだけどね」という話を何度もされました。「なぜですか」と言ったら、「釜山から時々見えるから行きたいと思っている人間がたくさんいる」と言うのです。当時は韓国人の日本へのノービザの時代ではございませんでしたので、それがビジネスだとまともに考えたことはなかったですけれども、その後、大亜

高速、未来高速が走り、我々がビジネスとして定期航路化したのはわずか 3 年前の 2011 年ですが、当時キムさんがおっしゃったように、たくさんの方に利用していただいています。

我々ビートルの人間にしてみると毎日船が博多港を出まして、沖ノ島まで行くと連絡が入ってきます。「船が。今、沖ノ島を通過」と言う頃がちょうど 1 時間です。そして三ツ島通過、これがちょうど 2 時間、全体で 2 時間 55 分の航路ですが、3 分の 1、3 分の 1 の一律化ですし、それと本当に対馬のおかげで冬の厳しい北西風から守られて動けるということもありますし、もしも何かあったときには対馬に飛び込めば船も助かることができるというふうにいつも対馬に抱かれてやっているという気持ちです。

それで「韓国人が多すぎて非常に問題だ」という報道をテレビで見ると、私も本当に心が痛みます。日本人が少ないのが問題だというのが、今日このテーマですが、私もそう思います。「韓国人が減った方がいいのか、日本人を増やさなければいけないのか」ということで言いますと、答えは自明でありまして、「増やし方をどうしようか」ということが問題なのですが、去年の 12 月 14 日に先ほど DVD で流れましたツアーがありまして、私は本当に素晴らしいと思いました。それまでそのツアーのことをよく知らなかったのですが、直前になって私は知りまして、対馬は博多から遠いですよね。興味を持っている人はたくさんいますが、「わざわざ対馬にそれだけの時間とお金を使って行くかといえば、韓国に行ったことがある人の 10 分の 1 ぐらいしか、対馬に行ったことがある人はいないと思います。

それを増やすために 2 つを組み合わせることによって、強い商品になることができるし、逆回りもできるし、あるいは全日空と組めば全国から福岡にまず来てもらって、それから対馬、釜山に行くことができる有望な地域ではないかと思っています。また、クルーズが流行っています。そこで、豪華客船ばかりではなくて、高速船で島巡りをするというクルーズもあっていいと思いますが、それができるところは全国でそんなにないですよね。1 つは伊豆七島、これは東京という大消費地を控えて、東海汽船が一般のフェリーと高速船を使って、そういう観光のネットワークをおつくりになっています。あるいは鹿児島の方でご存じのように屋久島、種子島、あるいはその向こうまでは行ってないですが、そういうクルーズができるところと同じです。

それともう 1 つは東シナ海、対馬海峡ではないかと思っていまして、国境観光という切り口もあるかもしれませんけれども、日本というメインランドの周りに広がっている島を使う観光ができるところということで、私ども船会社としては何らかの生かし方ができないかと思っているところです。以上です。

（薮野） どうもありがとうございました。私が対馬に行ったときは、当時は高速船ではなくて客船で行って、帰りは飛行機で帰っていました。ですから海と空の両方使える、コンビができるという意味では、それを生かして、これから新しい商品の開発にと思います。それでは、伊豆さん、よろしくお願いします。

（伊豆）私からは私どもの会社が過去に取り組んだ失敗例と成功例をお話しさせていただきたいと思います。お手元に A3 で畳み込んだ資料、4 枚物のやつがございますが、ちょっとそれを見ながらお話をさせていただきたいと思います。よろしくお願いします。

最初の資料には、「陶磁器の里を巡る韓国～九州 5 日間」とあります。これは 2000 年がちょうどミレニアムなので何か新しい商品を作ろうということで、韓国と九州、もう 1 つは中国の西安と京都といった、まさに国境を越えた旅行を 14 年前に私どもの会社で作りました。対馬は入っていなかったですけれども、国内・海外融合商品です。

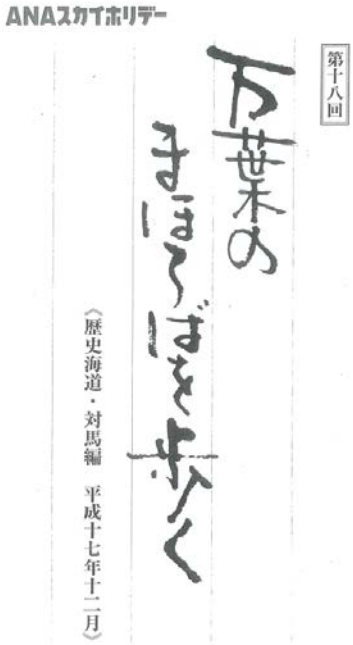
結果的に言うと、これはまったく売れませんでした。大失敗でした。その理由を今になって思い返しますと、商品はご覧の陶磁器伝来のルートを訪ねるということで非常にユニークですが、専門的な説明者はまったく同行せず普通の観光ガイドが通っているだけなので、興味のある人にとってはあまり面白くなかったのです。それから先ほど言いましたように、このパンフレットを作っても置き場所がなかったということと、プロモーション予算もないので全然しなかった結果、右の下に料金がありますが、一般の韓国旅行や対馬旅行にしては極めて高い……ということで、反省点ばかりですがまったく売れませんでした。

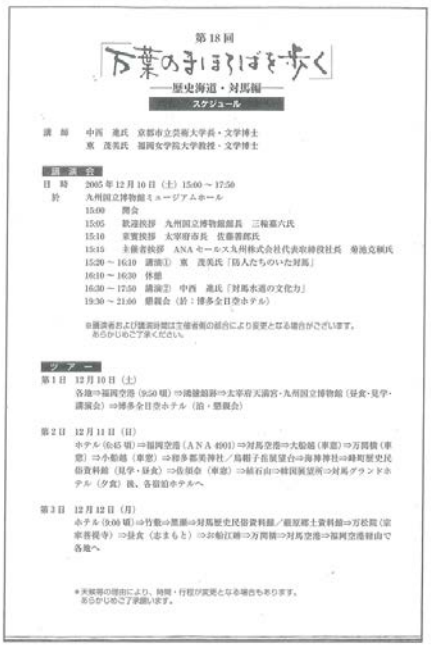
もう 1 つは成功例です。次はパンフレットじゃなくて申し訳ないですが、先ほど川口さんからもちょっとお話がありましたがけど、総務省に昔「地域再生マネージャー事業」という、地域に民間の会社から人を派遣する制度がありましたが、実は 2004 年から 3 年間、全日空の社員を対馬市に派遣させていただいたことがあります。社員 1 人で行ったのですが、それをサポートするために我々の会社の中に対馬販促協議会をつくって、一方では当時、対馬支庁（現在の対馬振興局）を中心に対馬交流特区推進本部も立ち上げていただいて、対馬市と ANA グループが協力し

て、対馬の観光資源の活用、観光客の受け入れ態勢の整備、あるいは韓国人観光客の誘致促進を2004 年から 3 年間一緒にやりました。

旅行以外で言うと、対馬産のしいたけを東京とか大阪のホテルで食べていただいた記憶があります。観光の面では、これはお手元にあります資料ですが、2005 年（平成 17 年）の 12 月に第18 回「万葉のまほろばを歩く～歴史海道・対馬編～」というシンポジウムとツアーを実施しました。万葉のまほろばを歩くという旅行は、日本全国の万葉集が歌われた場所に直接行って、その歌の歌われた歴史的な背景、時代模様文学的観点及び考古学的な観点で勉強するという内容のツアーです。約 25 年間の間で 18 回やらせていただきました。

毎回ツアーにはこの 3 枚目の資料にちょっと講演をしていただいたときの講演の骨子に、「対馬水道の文化力」が書いてありますけれども、ここに書いてあります昨年、文化勲章を取られました国文学者の中西進先生が毎回同行されまして、18 回のうち北は宮城県の多賀城市から沖縄県まで、それから朝鮮半島も行きました。18 回目が最終回だったのですが、これが対馬ということで「防人の歌」ということですけれども、その歌の内容だけではなくて、対馬、その対馬水道が持っている文化力や歴史力、歴史的な役割といったことを勉強しました。




第18回
「万葉のまほろばを歩く」
―歴史海道・対馬編―
スケジュール

講　師　中西　進氏　京都市立芸術大学長・文学博士
東　茂美氏　福岡女学院大学教授・文学博士

組 織 委

日　時　2005年12月10日（土）15:00～17:50
於　九州国立博物館ミュージアムホール
15:00　開会
15:05　歓迎挨拶　九州国立博物館館長　三輪嘉六氏
15:10　来賓挨拶　太宰府市長　佐藤善郎氏
15:15　主催者挨拶　ANAセールス九州株式会社代表取締役社長　菊池克頼氏
15:20～16:10　講演①　東　茂美氏「防人たちのいた対馬」
16:10～16:30　休憩
16:30～17:50　講演②　中西　進氏「対馬水道の文化力」
19:30～21:00　懇親会（於：博多全日空ホテル）

※講演者および講演時間は主催者側の都合により変更となる場合がございます。
あらかじめご了承ください。

ツ ア ー

第1日　12月10日（土）
各地⇒福岡空港（9:50頃）⇒浦塩観察⇒太宰府天満宮・九州国立博物館（昼食・見学・講演会）⇒博多全日空ホテル（泊・懇親会）

第2日　12月11日（日）
ホテル（6:45頃）⇒福岡空港（ANA 4901）⇒対馬空港⇒大船越（車窓）⇒万関橋（車窓）⇒小船越（車窓）⇒椎多都美神社／鳥帽子岳展望台⇒海神神社⇒峰町歴史民俗資料館（見学・昼食）⇒佐須奈（車窓）⇒結石山⇒韓国展望所⇒対馬グランドホテル（夕食）後、各宿泊ホテルへ。

第3日　12月12日（月）
ホテル（9:00頃）⇒竹敷⇒黒瀬⇒対馬歴史民俗資料館／観音郷土資料館⇒万松院（宗家菩提寺）⇒昼食（おまもと）⇒お船江跡⇒万関橋⇒対馬空港⇒福岡空港経由で各地へ。

＊天候等の理由により、時間・行程が変更となる場合もあります。
あらかじめご了承願います。

お客は 100 名以上集まって、私も一緒に全行程、回らせていただきましたが、天気がとてもよくて、先ほどスライドにありました韓国展望所から釜山が見えて非常に感動的でした。余談になりますが、『海行かば』を突然年配のお客様が歌い始めまして、100 人が全員で一緒に万葉集ではありませんが、ちょうど日露戦争のことでそういった歌も出ました。

この成功の一番のポイントは、我々と対馬市、それから地元の方の協力関係が一番だと思います。一緒に企画を考え、一緒にプロモーションもしまして、当日は永留久恵さんもご一緒に回っていただきましたし、JR 九州様にもご協力いただきました。それから 2 番目の理由は、先ほど中

西先生のお話をしましたけれども、中西先生は講演会だけではなくて 2 泊 3 日ずっと一緒に回って、各場所でしゃべっていただけるので、参加している万葉集のファン、歴史のファンや古代史のファンの方々が対馬の魅力の奥底まで知って帰れたのです。

簡単に言えば、知的好奇心を満たして帰っていただけたというのが、このツアーの一番の成功と思います。知りたいとか見たいという好奇心が旅に出るきっかけですが、特にシニアの方は知的な好奇心が非常に強いので、対馬、国境観光、韓国への旅する思いの動機付けには、この知的な好奇心が一番大きいと思います。

最後にこのツアーは別の年に朝鮮半島も行って、かつて百済であった扶餘（プヨ）にも行きました。同じお客が対馬にもプヨにも行っているので、国境観光も 1 回に行かなくても、もしテーマとか目的が一緒であれば 2 回、3 回に分けて、トータルで国境観光というようなこともあるのではないでしょうか。あまり 1 回で行ってしまうことにこだわる必要もないと感じました。

（薮野）どうもありがとうございました。なかなか示唆に富んだお話でした。私は CDI（コミュニティー・ベースド・デベロップメント・イニシアチブ）という、いわゆる海外の貧困をどう助けるかという NGO をしていましたが、そのツアーを組む際に行政と研究者と市民で 1 つのコースを見るときに立場が違うのです。行政は行政だけで行く、旅行会社は旅行会社で行く、NGO は NGO で行くので、研究者、市民、行政とそれから NGO の 4 者が同時に行って、それを見たものをどういうふうに感じるかということをいろいろ話し合ったという経験があるのです。

ですからこういう新しいコンセプトである「国境観光」を作るに当たっても、やはり船会社、航空会社、研究者、それから利用者の方が一緒に、九州経済調査協会が中心となって、パッケージのモニターを作っていろいろな意見を集約する必要があると思います。どうもありがとうございました。では、川口さん、お願いします。

（川口幹）今の伊豆さんのお話は非常に私も共感します。関連するお話になりますが、私たち MIT が 3 年間力を入れてやってきたことの 1 つに、「島おこし実践塾」というイベントがあります。「学びの旅」というコンセプトで、「とにかく対馬に来ていろいろな課題を学ぼう、いろいろな歴史や自然環境の成り立ちを学ぼう」という合宿型のプログラムです。　これは対馬市主催で、対馬市の援助をいただきながら、私たちがコーディネートをするという形でやっています。きっかけは私が島おこし協働隊の生物多様性保全の担当だったときに、対馬の自然にどういう特徴があるかといえば、人なくして成り立ってないと感じたことにあります。先ほど市長のお話の中にもありましたように、原生林に県道から 5 分か 10 分で行けるところはほかにないですよね。なぜそういう状況があるかというと、人々が山自体をご神体として守ってきた信仰の力によって非常に開発が容易である平地に近い場所でも原生林が残ってきたという背景もありますし、ツシマヤマネコが先ほどタネコといわれているというお話がありましたが、人間が農業や林業をやる中でつくられてきた里山の自然がヤマネコを育んできたという背景もがあります。

私は最初、エコツーリズムを対馬に普及させたいと思っていたのですけれども、純粋に自然を見るということだけではなくて、その背景にある人の暮らしをぜひ知ってほしいし、その中で島に暮らす人とのふれあいを、大事にしたいと思いましたので、島おこし実践塾を 3 年前から始めました。5 泊 6 日の合宿のプログラムですが、全国から学生がやってきます。

プログラムとしては、みんなで耕作放棄地の問題を学んだ後に開墾作業をしたり、対馬の基幹産業である原木栽培のしいたけの栽培体験、重労働ですが、原木を天地返しするといった汗だくになるような仕事をしたり、ぼろぼろになった空き屋をみんなで掃除するなど、「わざわざお金を出してそんなことをするのか」という作業ばかりやっています。

参加した学生はみんな満足して帰ってくださるし、その実践塾経験者は必ずといっていいほどもう一度、対馬を訪れるのです。そこで、それが対馬観光の神髄なのではないか、島の人との暮らしの共有なくして対馬の魅力を語れないのではないかとすごく思うようになりました。今、対馬が力を入れてやらなければいけないと思っているのが、民泊です。おうちに泊まろうという観光の形です。

今、「対馬グリーン・ブルーツーリズム協会」があって、そこで民泊の普及をしていますが、まだまだ軒数が少ないです。学びたいという知的好奇心を満たす最たるものが修学旅行と思っているのですが、修学旅行を受け入れるというためには、最低でも 1 クラス単位で同じ地区に泊まる態勢が必要と思っていまして、その 1 つの地区で 30 人単位のものを受け入れられる民泊の普及を、今後、力を入れてやっていきたいと思っています。

（薮野）どうもありがとうございます。若い人の経験はとても将来性があって、これからリピーターとして成長し、さらに民泊をするわけですから、なかなかいいアイデアですので、ぜひ拡大していっていただきたいと思います。それでは江口さん、よろしくお願いします。

（江口）島内の取り組みについて説明させていただきます。観光行政は、議論や夢物語は語り合っていいわけですが、現実になりますとなかなか難しい面がありまして、正月にされるすごろくのように、上がりに到達せず、ちょっとバックしてみたり、なかなか上がりの見えないものと思っております。

今回、ここで取り組みについて説明させていただきますが、対馬観光物産協会の方は長崎県や対馬市の人たちにいろいろと肩を借りながらやっているわけですけれども、韓国人はスマホを持っているのが今は多いものですから、各旅館にはもうほとんど Wi-Fi とウォシュレットは整備されています。それと対馬市長の発案で、厳原地区と比田勝地区では道路上で Wi-Fi をされてもつながるように、外国人や日本人向けの取り組みをしています。

それと対馬市が福岡の博多駅前に福岡事務所を、観光客誘致、旅行業者への PR や外食産業への対馬の産品の営業活動などを幅広く行うために設けていますが、それを拡大して去年の 11 月に「よりあい処つしま」をつくっていただきまして当協会が運営委託をしています。要するに食事

を提供することによって対馬の食材を博多の方たちに食べていただきます。「なぜ九州博多なのか」というのは、もう九州ではこの博多を押さえたら九州を押さえたようなもの、そして都会からも福岡の方に入っていただけますから、意外と福岡に拠点をつくることによって、どんどんどんどん日本全国に対馬の名前が広がっていくと思っているからです。

それと現在は「対馬マドンナ隊」、略して「つしまドンナ隊」ですが、だいたい 20 名ぐらいの女性のスタッフだけでやっている、女性から見た対馬を売り出す部隊があります。この部隊に登録していただいたら、今度は対馬が何かするときの情報発信やイベントの企画に参加していただいたり、女性の目から見てインターネットで流していただけるものですから、大変ありがたい組織です。これがまた 50 人、100 人に増えていけば、対馬を応援してくれる女性隊ができるのではないかと思っております。

それと博多駅にある博多阪急でアウトドアのイベントを開催していただいて、10 日から 2 週間程度、大々的に対馬のアウトドアをやってもらっています。そんな感じでできること、福岡の方でどんどんどんどん対馬という名前を発信していって、皆さんの印象に残る島……飲みに行くとどうしても、「壱岐は知っとるけど対馬は知らん」とよく言われるので、できるだけ壱岐に匹敵するぐらいの肩を並べる、それ以上になるように対馬の名前を知らしめていければと思っております。

（薮野）どうもありがとうございました。ご存じだと思いますが、九州全体で人口が約 1,500 万人、福岡県がそのうちの 3 分の 1 の 500 万人なので、福岡県はやっぱり相当大きいです。そのうちの 140 万人が福岡市、100 万人が北九州市ですから 240 万人とすると、500 万人のうちの半分が北九州市と福岡市ですから、人口のバランスとしてはものすごく集中化が激しいところです。

ですから福岡を押さえると九州全体が押さえられるということになってきますが、おっしゃるように、壱岐・対馬がどうしても我々の中でまだワンセットですね。ぜひ、皆さん、「壱岐・対馬」ではなくて、「対馬・壱岐」と見方を変えましょう。旅行会社のパンフレットもぜひ、「対馬・壱岐」と変えると意識も変わってきます。言わないと意識は変わりませんから、ぜひ「対馬・壱岐」という形でよろしくお願いします。

最後の発言のチャンスとなり申し訳ありませんが、これはやってみたいということ、あるいは将来に向かっての展望を、一言ずつお話をいただければありがたいと思いますが、市長から、よろしくお願いします。

（財部）キング牧師ではないですが、「私には夢があります」ということで、今から始めます。もう皆様、何度も何度も先ほどから見せられた絵でございます。福岡、釜山、そして対馬がすごく大きく書いてありますが、場所的にはこのような関係だと思っています。実はこの釜山から福岡の間を川口社長のビートルが横切って、2 時間 55 分で釜山に行っております。実は 5 年ほど前にこの地域から福岡までのジェットフォイルを、九州郵船がずっと通わしていたのですけれども、

日本全国すべて同じ状況にはあるわけですけれども、特に北部対馬における人口減少が甚だしく、ここに乗船客が減って赤字が増えたということで、このジェットフォイルがなくなりました。

なくなったときに川口社長のビートルがブーッと毎回ここを通られるものですから、ここに住んでいる方から「おい、あのビートル、乗れるのかな」という話になりました。早速、入国管理局や税関などいろいろなところを回りました。しかし、なかなか日本の法律はハードルが高くて、なかなか越えられません。やはり出入国管理法は国の基本を成す水際の法律で、そのハードルが高い理由も十分に分かります。

しかし市民から、「どうにかして、あのビートルに乗りたいよね」とずっといわれます。私どもも何度となく国にチャレンジはしていくのですけれども、特に入国管理局の壁を越えられずにいます。「国際航路に国内客が乗る」というのがいけないのです。しかし乗りたいのです。

「乗る方法はないか」とずっと考えた結果、ここを国際航路にして、こっちを国内航路にして、同じ船で通わせるという方法ができるのではないかと。しかし、おそらく今度は財務省から問題が出てくるのです。おそらく国際航路の油の税金は無税ですが、国内航路は税金が掛かっています。「じゃあ、ここ、どうするの、税金の問題は……」といろいろな問題がいっぱいここにはあるのです。

そういうことはありますが、ここにいる皆さんと一緒になってやればできることを、今、組み立てているところです。そうすれば釜山から入ってくる方たち、そして、先ほど釜山にこちらから行く人たちが対馬に 1 回寄って、日本の文化をきちんと味わってから釜山に入るという、「国境観光」が成り立つのではないかと思って、今からずっと提唱していこうと思っています。

この北部において私どもは本当にどうすればいいか……いろいろなことを組み立てていかないといけません。実は 10 月の末にもう十何年にわたって釜山では国際花火大会をやっています。こ

ちらも 7 月末に花火大会がありますが、その比じゃないです。だってここでは花火が 8 万発上がります。こちらからも 10 月末に見えます。私どもはそれを見るに付け、「ああ、釜山って近いな」と感じていました。

「では、発想を変えて、こちらで上げちゃえ。そうしたらこちらの人たちが、わっ、対馬って近いんだ。」と感じてもらう流れの中で「国境観光」に組み込んでいくというやり方が、ひいてはここに住んでいる市民にとっても喜ばれるというものにできないものかという考えを持って、今、動きだそうとしております。花火については議会の方のご理解もいただいて、10 月末にこの釜山で上がる国際花火大会と連動しながらやっていこうということで、6 月 3 日まで釜山市長だった許（ホ）市長とは話がついていまして、7 月末に実は釜山市長を訪ねるのですが、そのときにこの日程等もきちんと決めてきて、どのように連動していくかを組み立てたいと思っていますし、そのことによってこちらから入ってくる人たちをつくり込んでいきたいと思っています。

「対馬から釜山の 8 万発が見れまっせ」と売ろうと思っています。人の金かもしれませんが、それでも「使えるものは何でも使っちゃえ」と考えております。そして対馬に人がいっぱい入ってきて、対馬の重層感のある歴史を感じていただける。そして先ほど冒頭に話がありました藤井敦子さんのような素晴らしいガイドさんの下で、ガイドをしてもらえれば、対馬をさらに好きになってもらえるということを組み立てていければと思っています。また、先ほど川口幹子さんが言いましたけれども、「着地型観光」としてスタディーツアーをそういう中に入れ込んでいくことが、これからの対馬の魅力を膨らませていくやり方だとあらためて今日、ここに来て感じたところです。

（薮野）ありがとうございました。「国境観光」という新しいコンセプトですが、ヨーロッパでは陸路で国境を越える経験があります。例えば、オーストリアからクロアチアに夜行列車で通るときに夜行列車の中で乗客が全部一応パスポートを渡して、乗っている間に車掌さんがパスポートに入国の印鑑を押して、朝出ると車掌さんが返してくれて、朝ご飯をくれるのです。

ですからそういう事例を見ていけば、「海外では、車内に入管が入ってきてパスポートを押すことがあるのではないか」ということを見ていただければと思います。そこで、そういう視察でヨーロッパに行かれるときは連れていってください（笑）。それでは川口社長お願いいたします。

（川口史）財部市長から大胆なご提言がありましたけれども、基本的に船の場合外国航路に使う船と国内営業に使う船は、登録から何からみんな違っていまして、ここら辺には船に特質のなかなか越えにくいハードルがありますが、私どもは基本的には冒頭から申し上げていますように、何らかの形で対馬にお役に立っていきたいと思っておりますので、いろいろご相談にあずからせていただければと思います。

私は今、船屋をやっていますけれども、昔は旅行屋をやっていたこともありまして、オランダのデン・ハーグにハウステンボスという宮殿があるのですが、そこから長崎のハウステンボスま

で「列車を走らせよう」と言って、途中、飛行機をチャーターで入れましたけれども、国境を十いくつか 1 つの列車で越えるという旅をやってきました。何でやったかというと私の個人的な知的好奇心といいますか、金髪で青目の人たちが住んでいるところが、どうやって黒い目の、黒い髪の国になるのかというのを地べたでずっと見てみたかったからです。

30 日間かかりましたけれども、日本ツアー・オブ・ザ・イヤーというめったにもらえない賞をいただきました、オランダ人 50 人と日本人 50 人が乗って 20 両の列車をチャーターして走りましたが、これに乗った方が、その後、「お前たちが作る旅行は何でもいいからとにかく行くから」と言って、何百万円の旅行でも参加してくださるというようなことがありましたので、そういう層の方はいるというのは実感があります。

「国境観光」という言葉は、私も今回、岩下先生と話して、初めて知ったのですが、今日の話を聞いていますと、私はかつて数年前に長崎の駅ビルの社長をやっていたことがあるのですが、「長崎初めて物語」みたいな感じで、「電信が来たのも長崎が初めてだよ」「ボウリングが来たのも初めてだよ」とたくさんあるのですが、「これって一種の国境じゃないかな」と思うのです。つまり交通機関の変化によって国境というのはいろいろ変わってくるのです。歩いて行っていると地理的な国境がありますが、船が着くところが国境になったり、あるいは成田空港も一種の国境なのかもしれません。

ただ、私は博多の人間だから博多の悪口を少し言ってもいいと思いますけれども、「博多が初めてだ」という話もいっぱいありますが、問題は何が残っているかということだと思うのです。つまり史跡のようなハードでもいいかもしれないし、あるいは国境の島にいろいろな国の人がざわざわ歩いているという文化的なものも当然、その 1 つであろうし、そこにある文化的なもの……家の建て方、食べ物などに国境らしさがどれだけ残っているのかということだろうと思うのです。

最後の私の課題としていわれているのは、ANA と組んで対馬と韓国の旅の販売がどうだろうかという話でしょうが、「面白いものはあるな」と思っていますが、「いったい対馬とは何ぞや」というところで、「国境観光」という切り口で見てみれば自然だとか素晴らしいものはいっぱいあると思いますが、やはり何が残っているかでしょう。ロシアとの日本海海戦の跡は面白い話ですよね。語りなんかが加わってくるとさらに膨らみが出てくるでしょう。

神社もすごく好きなものですから、たくさん対馬で行かせていただきましたけれども、やはり分かっている人間には分かるのです。さっき川口さんがおっしゃったように非常にマニアックな世界ではとても面白いですが、一般の方にはなかなか受け入れられないし、分かってもらえないものですから、対馬はその後あまり手が入ってない分だけ、いいものがいっぱい残っていると思います。

「何が残っているか」ということを自覚して、「それをどう見せるのか」というところに、少し手が加わっていけば、観光のへそになる歴史民俗資料館に誰が行っても、「なるほどね」というものになるとすごくいいです。そうしていくと旅行商品としても団体でも行けるし、個人、グループでも行ける旅行商品として育っていけるのではないのかと思っております。

我々も努力していきたいと思いますが、ぜひ、さっきもお話がありましたように、地元と力を合わせて少しずつよくしていって、それを組み合わせると素晴らしいものになるのではないかと思っております。

（薮野）ありがとうございました。船の方からアプローチがありましたので、空の方もぜひお願いいたします。

（伊豆）はい。「国境観光」は今、川口社長もおっしゃっていましたし、私もさっき申し上げましたけれども、岩下先生にお会いして初めてその言葉を知りました。結構、私も国境には行っているのですが、「国境観光」というコンセプトで、そこにいたことはたぶん多くの人もいないと思うのですよね。逆に言うと、旅行の物語が書きやすいコンセプトをいただけたということで、非常に感謝をしております。

例えば「グリーンツーリズム」や「エコツーリズム」のように、「何とかツーリズム」と言うとその言葉はすごく有名になりますね。だからまずこれから取り組んでいく中で、「ボーダーツーリズム」という言葉とコンセプトを世に広めるということが非常に大事だし、そこで我々の会社が微力ながらご協力させていただくこともあるかと思います。

実は場所は違うのですが、来年になりますと稚内～サハリンのツアーをやる予定になっています。稚内～サハリンの間も 200 名ちょっとの日本のフェリーが 4 カ月間ぐらい期間運航していますが、乗客の 70%はロシア人だそうです。従って日本人を乗せなくではいけないということで、我々は稚内路線を持っているので「稚内・サハリン」ツアーもします。それから同じように、これは偶然ですが、小笠原ツアーも来年からやろうと思っていまして、そのパンフレットにはぜひ「ボーダーツーリズム」という言葉と「ボーダーツーリズムとは」といううんちくを考えていただいて、ぜひ掲載させていただければと思います。

それから対馬に関して申し上げますと、先ほど申し上げたような知的好奇心をくすぐるようなものを、JR 九州とも協力してやってみたいのですが、1 発で終わってはだめなので、そのイベントがきっかけとなるものをぜひやりたいと思います。前回もそれから数年間はだいぶお客さんが多かったのですがまた減ってきているということもありますので、継続的なきっかけとなるようなことをやりたいと考えています。考えているというか、それが夢です。

それと、来年は日韓国交正常化 50 周年になるそうです。来年に向けて政府レベルでは日韓で観光促進をやろうということが新聞にも出ていましたが、これだけ多くの方が韓国から来ている対馬に、日本人も行って一緒に何かできるようなツアーができればと考えています。お手元の資料を見ていただきたいのですが、うちの会社で中国の杭州の「西湖」という場所の周り 15～16 キロを、「ふれあいウォーク」と銘打って歩くツアーを 2010 年ぐらいまでやっていました。その後は政治問題で中止になっていますが。

No.8　2014 年 10 月 31 日

2009 年にはこの新聞記事にありますが、実はアシアナが韓国から連れてきて、我が日本から連れていって、日中韓で言葉は通じないのですが身ぶり手ぶりで 1,000 名が西湖を歩いたことがあります。実は持ち回りでやろうと、ソウルの漢江ウォークはしたのですが、まだ日本でやっていません。だからもしそういうお勧めのウォーキングコースが対馬にも「もみじ街道」があると聞いているのですが、夢としては日中韓、そうでなくても韓国の方と日本の方が、対馬で一緒に手をつないで歩くようなことができたらいいと思います。

繰り返しますが、このウォーキング大会も先ほど説明した万葉集のツアーも、成功の秘訣は地元との協力関係……、アイデアの交換、人材の交流、費用の分担など、いろいろなことを地元と一緒にやることです。それから薮野先生もおっしゃっていたように、地域研究をされている方もそこに加わっていただくと、非常に知的好奇心の深みが増すのではないかと思っています。

いずれにしろ、もともと観光というのは平和産業で、何かあるとすぐだめになってしまうのですね。ですから国境エリアを目的地とした観光が盛んになるのは「平和ならでは」と思いますので、ぜひ、「ボーダーツーリズム」の先駆けとして対馬～韓国の国境ツアーが活性化することを、最後に心よりお祈りをします。ぜひ ANA グループも微力ですけれども、何らかの形で協力をしていきたいと思っています。ありがとうございました。

（薮野）ありがとうございました。力強いボーダーツーリズムで、本当に大きな夢ですが、ぜひ実現していただきたいと思います。次に、川口さん、よろしくお願いします。

（川口幹）私もここに参加させていただいて、いろいろな方の話を聞いて、いろいろ勉強になりました。国境観光というのは新たな視点だと思ったのですが、私たちがコンセプトにしている旅の形はやはり「学ぶ」とか「暮らす」ということで、その中に国境を意識する場面はたくさんありますね。

1 つの例として、私が住んでいる集落に川がありますが、そこに大きい平らな石が沈んでいます。「この石は何か」と聞いたら、「ここで韓国人から洗濯の仕方を教わった。韓国人はとにかく洗濯が上手だ。」とおっしゃっていました。そういうことを生々しく感じるのが対馬の暮らしなのです。「石垣の組み方を韓国人から教わった」「家にあるオンドルの作り方を韓国人から作り方を教わった」という話をすごくたくさん聞きます。

私たちは「着地型観光」ということで、例えば「東京発着 3 泊 4 日ツアー」といった発地型の観光商品を開発するのではなく、島に来ていただいた方に楽しんでいただくという着地型の観光を推進する団体になろうと思っています。着地型のツアープログラムを考えるにあたって、私たち自身がいろいろなもののスペシャリストとして、いろいろな知識を持っている必要はないと思っています。そういった旅のヒントは住民が持っているのです。そういったところをつないでいきたいというのが私たちの思いですが、それを形にするために、きちんと旅行業としての登録を進めたいと思っています。

旅行業をするためには、登録をするのにお金が掛かりますが、特に国境観光の場合は国際旅行になりますので、第 1 種の旅行業が必要となります。これが私たち弱小一般社団法人では、とてもとても手が出ない金額なのですが、地域限定旅行業が最近でき、これは私たちでも何とか頑張れば手が出る金額なので、その旅行業の登録を取ろうと考えています。

ただし、それは対馬島内のプログラムに限定され、島内発着もしくは福岡・長崎発着のパッケージツアーしか販売できませんので、国境を越えるということになると、どうしても ANA セールスや JR 九州が商品化して、販売していただく必要が出てきます。私が常々思うことは、着地型観光の先生は島の人だと思っていて、そこの部分のコーディネートを私たちがしますが、集客、PR、販売といったところは大手の力を借りたいので、現地と大手とのうまい連携ができないかと考えているところです。

最後に、観光業は種をまいてから実入りが出てくるまでには時間がかかる仕事ですが、今、県の起業支援をいただきまして、対馬の着地型観光を進めるための委託を受けています。それを専門にやって、現地の人の話を聞いてツアーの種を探していく人を募集していまして、お手元の資料の中に、この着地型観光コーディネーター募集というチラシを入れさせていただきましたが、そんな人を私たちは急募しています。

どういう人が好ましいのかなと思いますが、できれば旅行業のプロであってもほしいですが、それよりも大事なことは、その島の人と仲よくなり、自分自身が島の暮らしを楽しめる能力が、観光の種を見つけるというところではすごく重要なスキルではないかと思っていて、8 月ぐらいから雇用したいと思っています。

私たちもまだ観光業に関しては卵でして、まだきちんと商品を開発して販売するところまではできていませんが、徐々にそういう体制を整えて、将来的には ANA や JR 九州と一緒に、そういった観光商品をつくっていける団体になりたいと思っています。ありがとうございました。

（**薮野**）どうもありがとうございます。チラシを見ると皆さん若いですから、大きな規模で活動していただければとてもありがたいと思います。それでは江口さん、よろしくお願いします。

（江口）はい。今後の展望ですが、当協会としては、まず会員の意識を変えていかなければいけないだろうと思います。会員の意識が変わると物産においては商品開発も変わっていくし、ホテル業も運輸業もよりよいものに変わっていきます。それによって所得が図られ、所得が向上すると今度は雇用につながり、そして、いいようなスパイラルに持っていければと思っております。

今後は対馬としても、『一宮参り』や『万葉集』など個別に趣味のある都心のお客さんの下地を掘り起こしながら、対馬には要塞も 31 カ所ぐらいあり、明治の中期ぐらいから昭和初期にかけて、対馬の周りには 31 基砲台が設けられていますが、それらを趣味で見てみたいというのがやはり根強くあります。

それと民俗学者の宮本常一さんは、「資源は眠っているものであり、それを見つけるのは人間である。人間が見つけない限り資源は資源ではない。資源は見つけることができてくるし、生かされるものである。」と述べています。要するに、資源は人間が見つけて初めて資源になるわけですが、対馬観光物産協会の会員も島内にいる会員の目から見た資源、それとまた違う意味で、福岡に住んでおられる皆様の目から見た資源もありますよね。ただ、島民の視点とギャップがありますから、ここにお集まりの皆さんが、「こういうことをしたら面白いんじゃない」という視点がありましたら、またいろいろ教えていただければ私たちも助かります。

何を私が皆さんにお話ししていいか分からなかったのですが、対馬の観光物産としてできる限り、今、一生懸命みんなで意識を変えながら頑張りますし、それに対して対馬市も長崎県も協力体制を取ってくれていますので、皆さんに一度対馬に訪れていただいて、目で見て耳で聞いて肌で感じて、それを伝えていってくれるのが一番だと思っております。

（薮野）どうもありがとうございました。一応予定しておりましたパネリストの方々には、お話をしていただきましたが、コーディネーターである私の特権として問題点を２つ指摘させていただきます。1 つは「国境観光」に関してですが、相手側の釜山の話があんまりありませんよね。ぜひ次回こういうことがあるときには韓国の人、釜山の人が対馬をどう見ているのかといういわゆる対象型の話をしないといけませんよね。

もう 1 つは市長に直接お尋ねしたいことですが、比田勝に韓国の方はずいぶん来られていることは知っていました。ただ、韓国にもいっぱい自然があるのに対馬に来られる理由は何ですか。

（江口）　釜山からですと済州島よりも対馬の方が近いですし、済州島では磯が荒れているので対馬で釣りをする方が良いというお客さんも多いです。しそれから片道 5,000 円で往復できるのも、やはり韓国からのお客さんが多い原因ではないかと思っています。

（薮野）分かりました。韓国から見ると、安くて釣りもできて楽しいところだから来られるということですが、日本人、特に福岡に対する対馬の売りは何でしょうか。大河ドラマで出てくればまた別ですけれども、何かキャッチーな対馬がわっと突出するようなものが何かあれば、そこに

行って、それから釜山がということになりますが、福岡の人間が 1 泊 2 日でどこか旅行に行こうかというと、対馬を越えて釜山に行ってしまいます。そのときに一度釜山から対馬に日本人を吸引する力は何でしょうか。

（財部）それを探し求めて今日もここに来ましたが、現時点で私に明快なる答えは実はないです。川口幹子さんが 3 年前に対馬に来てから感じていることですが、彼女が来たのは 3 年前のちょうど 6 月だったと思います。その 3 カ月前に東北震災がありました。そのころから若い研究者や若い人たちの価値観が変わってきて、対馬によく目を向けてくれています。

そして、おそらく自分探しの旅なのか、もしかするともっと大きく言えば、日本というものを探し求めている旅といいますか、彼女らのところに来て 3 カ月も 4 カ月もインターンとして入ってくる学生が、おそらく今年も百何十名いるわけです。

実は域学連携ということで去年から 11 ～12 大学と連携しながら対馬でフィールドワークをしてもらっていますが、それらもどんどん増えてきているのも、やはり若者の考え方が変わってきているからだと思います。

私どもは無理にキャッチーなことをするよりも、心が変わってきている今の若い人たちを引っ張り込んでくるということで変えていくということを、すなわち、川口幹子さんがさっき言ったようなスタディーツアーをどう組み立てていくかということではないでしょうか。

おそらく十何年前からもう団体旅行なしで孤族化していたではないですか。その孤族化の方向性が、おそらくそこの心の部分で、今まさに MIT がやっていこうとしている部分と合致してきているのではないかと思っています。

そういうところを、冒頭言いました対馬の自然、生き物を大切にしていくことが、日本そのものの原風景を残していくことに、きちんとなっていくはずだという思いを持っているのですが。

（薮野）ありがとうございました。この会場の中に比田勝で免税店を営んでおられる方がおられるということですが、韓国から来てどういうご感想をお持ちかお話をいただければありがたいと思います。韓国の人々が対馬に行きたいという気持ちはどこから生まれてくるのでしょうか。

（フロア）先ほど言われましたように、韓国から一番近いし、自然の美しいところもあるし、若い子たちが、一番値段が安い免税商品を買うために来るからだと思います。

5 月に韓国で船の事件がありましたので、値段がとても安くなって、最近はまた個人客が結構増えました。今のところ値段が安いことがメリットだと思います。そして、釣りや山登りのために対馬にたくさん来るのだと思います。

（薮野）どうもありがとうございました。よく似たことがあって、日本人がシンガポールに行くのは、シンガポールを楽しむためではなくて、免税品を買うのが目的だということがよく言われ

ていて、私もかつては東南アジアにゼミ旅行で行った際、学生は 10 万円ぐらい免税品を買うためにお小遣いを持ってくるということにはびっくりしました。

そういう免税という問題もありますが、対馬の売りをどうしていったらいいでしょうかね。ここからはフロアはオープンなので、そういうことに対するコメント、意見、あるいは疑問があればどうぞご自由にご発言をいただければ、ありがたいのですがどうでしょうか。

（フロア）私は川口社長がおっしゃったように、ビートル就航当時から韓国スタッフとして働いて、今は JR 九州におります。今、韓国からのお客さんの中にはパターンが 2 つあると思います。1 つは日帰りツアーをなさる方で、本当に免税とか気軽に外国に出てみようよという方だと思います。

自分も釜山に住んでいるときは何回も対馬を見ました。太宗台とか海雲台で見えますから。また、先ほど先生がおっしゃったように、韓国でも自然があふれるところはいっぱいありますが、韓国の自然と対島の自然は違います。歴史もあるし、自然もあります。そういう点から、今、日本の国の中では、もしかしたら対島が韓国に取られるのではないかというネガティブなところも確かにあると思いますが、韓国人が 1 泊 2 日して家族でのんびり過ごせたり、都会の中でのストレスを癒やされるような着地型になればもうちょっと韓国人観光客が増えると思います。

それから先ほど、「なぜ対馬壱岐にならないで壱岐対馬になっているか」という話をなさいましたね。自分が 20 年前に行った対馬と現時点の対馬は変わっています。あるとき、対馬に行って刺し身や寿司を食べました。

対馬に行ったら、私の希望としては、天然物を食べたかったのですが、出てくるのは養殖でした。福岡に住んでいる方は、養殖物はいくらでも食べられます。わざわざ対馬まで福岡より高いものを食べに行くか否かということが壱岐と対馬の差だと思います。

国境マラソンの日の高速船スケジュール（対馬・比田勝港）

（薮野）ありがとうございました。どなたか意見を考えていただく間に由布院の話をしたいのですが、由布院の近くには別府があって、由布院はまったく有名ではなくて山しかありませんでしたが、ある小説家が「由布院がいいな」と言って、一躍有名になったのです。

ですからどなたか「対馬がいいな」と言うことがものすごく必要ですよね。HKT ではちょっと若すぎますが、メッセンジャーが必要なので、ほかに何かそういう仕掛けということも考えて、誰かが「行ってみたい」と言うことも 1 つの戦略だと思うのです。

私が「行きたい」と言ったって、じいさんが言っているだけだということになりますからね。ぜひ市長が、お忙しいので、今朝出られたのですよね。

（財部）はい。

（司会）今日帰られますか。

（財部）いえいえ、明日帰ります。

（司会）福岡に 1 泊していただいて、福岡にお金を落としていただけるのですから、ぜひその分だけゲットするものを持って帰っていただかないと一番困りますので、ぜひ皆さん、何かアイデアがあればご意見をいただければありがたいのですが、どうぞ。

（フロア）私は日本ユーラシア協会というロシアと交流している団体の松山支部の者ですが、松山で日露戦争の『坂の上の雲』の街づくりもやっております。そこで思い付いたのですが、ロシアとも交流してみるというのはどうかと思いました。対馬もロシアとの交流もありますし、最近、ロシアのアムール州とも交流していますが、北朝鮮や韓国の人はロシアにだいぶ働きに来ています。ビザもフリーになりましたし。

北朝鮮自体もウラジオストクを通じてロシアに流入して、農地開拓をしている人もいるから、ロシア人とも交流して韓国も入れて日本も入れると、また 1 つ新しい展開があるのではないかと思うのですが、どうでしょうか。

（薮野）ありがとうございました。どうですか、市長、ロシアを入れるということですが。

（財部）2012 年にサハリンまで稚内から船に乗って行った際に、30 分程度話をさせてもらいました。対馬の一番北の方に西泊という地区がありますが、その地区がロシア兵を助けるということがありました。その話を 30 分間したところ、ロシアの方たちが、そんな事実は知らず、「Tsushima War」しか知らなかったということでした。

「助けられたんだ」ということを伝えることによって、『坂の上の雲』の方ではないですが、ロ

シアの方たちとのお付き合いとか、ロシアに行っている韓国の方、北朝鮮の方たちとの関係というものも見いだせると、そのときも感じた次第ですが、いかんせん対馬は幕末に芋崎というところをロシアに半年占領されたところでもあるのです。そのとき確か 2 名殺されたのではないかと思います。

だから 160 年ぐらい前の話もありますが、100 年ほど前の美しい話と併せて、それらをきちんと伝えていきながら、そういうところともお付き合いをやっていきたいと思っております。

（司会）ありがとうございました。次、どうぞ。

（フロア）私は対馬に 30 年間住んでいました。対馬に住んでいた当時、私の友達が私に対島を有名にするにはどうしたらいいのかと豆酘崎の先で話したことがあります。私はとっさに「水戸黄門あるいはフーテンの寅さんを対馬に呼んでロケをしたらどうか」と言いました。北條誠の『君の名は』が一世を風靡して、雲仙が瞬く間にいわゆる温泉地としての新婚旅行の当時のメッカとなったという意味合いでそう言ったら、彼は早速 1 週間後に 10 キロ台のブリを持って山田先生のところへ行って、「対馬でどうかフーテンの寅さんをロケしてくれ」と交渉したわけですね。

そのときにもうすでに大阪を主体に撮っていたロケ隊が急遽対馬に来まして、ロケが実現できたわけです。今、福岡は黒田官兵衛が大きなブームで、大きな観光地として歴史的にも脚光を浴びています。

そういった意味で、対馬もやはり歴史が非常に深いものがあるわけです。例えば、韓国の歴史学者が「天照大神は対馬に実はいらっしゃって、対馬海流を利用して出雲の神様のところにお参りをしていた」と言っています。それはあくまで古代史ですので、どこまで現実のものか分からないのですが、対馬をいわゆる効率的、効果的、あるいは時間を短縮して一定の効果を上げるには、そういうことを掘り下げる方法もあるのではないかと思います。

当時、先ほど由布院の話が出ましたが、私も玉の湯旅館の溝口薫平さんのところに会いに行きました。30 年かかったそうです、由布院を現在のような観光地にするには時間もかかるわけですので、やはり NHK の大河ドラマを、対馬を舞台にしてやってもらうという角度から考え方もあると思います。

（司会）ありがとうございました。では、最後にお願いします。

（フロア）私は東京から来て新聞記者をしています。7～8 年前に福岡に 2 年 8 カ月ほど住んでおりまして、そのときに、いる間にぜひ対馬に行こうと思っていて、とうとう行けなかったままに終わっている宿題を残したままの思いもあって今日は参りました。

それでお伺いしたいのですけれども、先ほど薮野先生が「福岡の人間が 1 泊 2 日で遊ぶとすると釜山に行ってしまう。対馬にどうしても行きたいと思うような魅力は何ですか。」という質問を

されたのに対して、財部市長は、それに真っすぐ答えずに、MIT の川口さんのお話を例にされながら実は若者の考え方が変わってきている」と言われました。つまり対馬の方が変わるのではなくて、世の中が変わってきているということを逆に対馬が受け入れたいということですね。

今、大河ドラマの話があり、私もさっきそういうことを考えましたが、そういうこと自身が実はもう古い発想で、若い人たちが、あそこは有名だから行くのではなくて、今までと全然違うものを求めているのではないでしょうか。それを対馬が受け入れるということを考えていらっしゃるのでしょうか。

それからこれも 7～8 年前にずいぶん問題になった話ですけれども、沖縄のとある島で、観光を考えていましたが、なかなか来ませんでした。そうしたら、あるとき、日本か外国の大きな資本がそこにホテルを造るというので、賛成と反対が大きく出たという話がありました。先ほど宿泊施設があまりないというお話がありましたけれども、仮に日本あるいは外国の観光資本が対馬に大規模なリゾートホテルを造るという話が出たら、それは対馬にとってもありがたいと賛成されるのか、それとも、それは本来の対島の在り方ではないから、今のような形でもいいので少しずつやっていきたいとお考えなのでしょうか。以上 2 点伺わせていただけたらと思います。

（薮野）ありがとうございます。では、市長、ご回答をお願いします。

（財部）「1 点目の薮野先生の質問をかわしたね」とおっしゃったわけですが、決してかわしたわけじゃなくて、私どもが新たな物事のつくり込みをやっていくよりも、それよりも早くに若い人たちの考え方が変わってきていることを、僕らはとらえて物事の組み立てをやっていったら早いのではないかと思いを今持っているということです。

2 点目の外国資本の投資に関してどのように考えていくのかということですが、基本的には島内資本を第 1 に考え、第 2 が国内資本、そして第 3 が国外資本という順番をきちんとつけ、第 1、第 2 において投資を促すことができないときに第 3 に入っていこうと私自身は思っていますし、議会の皆様もそのように感じていると思います。

（薮野）ありがとうございました。まだご意見があると思いますが、お約束の時間ですので、申し訳ありませんが質問はこれまでということで、岩下明裕先生からの発言をクロージングのリマークスとしますが。

（岩下明裕）私が約束してしまったので、先にあの方に一言だけご発言いただきます。

（フロア）私は対馬の雨森芳洲の外交塾の卒業生です。今日は市民交流の視点を聞きたいと思いまいりました。市民交流という点から見ますと、過去に対馬市がやった雨森芳洲外交塾の韓国の卒業生が 300 名、日本人の卒業が約 200 名いるのです。

この外交塾はいったん終了しておりますが、昨年より長崎県の日韓未来塾という新しい切り口で始まっています。これは対馬市にも行きますし、長崎の平和祈念館も見ます。

せんだって聞きますと 5 年は続くと言っていましたので、これを切り口に財部市長にぜひお願いしたいのは、対馬市に博物館を建設する動きを聞いておりますので、そこに日本人と韓国人が宿泊体験型の歴史をお互いにさらに勉強していく場を作ってほしいということです。以上です。

（岩下）ありがとうございました。「軍事国境を生活国境の場に変える」というのは薮野理事長の提言でもございます。

今日のシンポジウムは、皆さんが夢を語る場になりましたが、私はそれをどうやって現実に少しでも近づけるかということをずっと考えていました。後ろで販売しているブックレットも、自費出版で出しても、少しは買ってくれてもやっぱり世間的に認知されません。それで北海道大学出版会と組んで、マーケットに出しまして「Amazon」でも買えるようにしています。

ただ、それだけだと我々も製作費が取れないので、実は対馬にマラソンと一緒に運びまして 500 部、対島ならどこでも買えるように空港に 100 部置かせていただきました。2 号の企画として考えているのが、与那国と根室。そして 3 号は実は先ほど伊豆さんがおっしゃいましたが、稚内の国境観光をテーマにして出そうと考えています。このように具体的に何をやっていくかということを考えております。

今後の具体的なアクションですが、我々特定非営利活動法人日本国境地域研究センター（JCBS）と、日本の境界地域の行政機関や北大及び九大などが連携している境界地域研究ネットワーク JAPAN（JIBSN）で、実はもういくつか仕掛けています。具体的には今年は台湾と八重山のモニターツアーも企画していくことがほぼ決まっていて、我々と九経調と竹富町で組んで、島田さんを中心に進めることになっています。

それから来年は実は伊豆さんのヒントを受け、実は先日、稚内に日帰りで行って商工会議所と話をしました。副会頭が「やりましょう。ぜひ伊豆さんと一緒に来てください」と言われています。来年は我々ももちろん地元である稚内も動きだしています。

対馬に関しては、去年のモニターツアーを、JR 九州旅行を中心に、JR、ANA で一般向け商品として出していただきたいと、この場でお約束していただけなかったのは残念ですが、おそらくそれは検討していただくとしても、何かやっぱり社長がおっしゃったように継続しなければいけないと思います。

それで、JCBS の会員を中心に委託ツアーを無理やりつくって、ANA で飛んで対馬を縦走し、DVD で行ったところを回って、それで比田勝に泊まって、私と花松であのブックレットに書けなかった本当の対島をレクチャーして、その後に JR の高速船で釜山に行って、焼き肉を食べて現地解散という企画を 11 月か 12 月に 20 人ぐらいで、委託で仕立ててお願いしようと考え始めています。

いわば国境ツアー、前回の継続で応用編ということでやろうかなと思い始めていますので、も

しご関心のある方は、いや、いきなり NPO には入れないけど、もしそれをやるなら俺も行きたいという方がおられましたら、うちの NPO のスタッフに名刺を 1 つ置いていただければ限定 20 人でつくりますので、ご案内させていただければと思います。

ということで、やっぱり今日は夢を語り、共有する場が中心でしたが、「ああ、面白いシンポジウムだったね」と言って、何も動かずすぐ忘れ去られていくということだけは避けたいので、ここにおられる皆さんも、ぜひ今日は「ボーダーツーリズム」という言葉を持って帰って、一緒にやっていければと思います。今日は長時間パネリストの方々、皆様、ありがとうございました。心よりお礼を申し上げます。

（島田）どうも皆様、長時間ありがとうございました。ここにそばで座っていらっしゃいますけれども、熱心なパネルディスカッションをしてくださった薮野先生、本当にありがとうございました。パネリストの皆さんも本当にありがとうございました。皆様、どうぞ拍手をお願いいたします。長時間ありがとうございました。これで終わります。

島田研究員が組織した国境観光モニターツアー

シンポジウム

日本初の国境観光を創る
― 対馬の挑戦

2014年7月7日(月)
13:30~16:30 [受付開始 13:00]

13:30~14:00　基調報告
福岡発対馬経由釜山行きのモニターツアー実施
[報告者] 岩下 明裕（JIBSN 副代表幹事／北海道大学 スラブ・ユーラシア研究センター 教授）
花松 泰倫（九州大学 持続可能な社会のための決断科学センター 講師）

14:00~14:15　DVD上映
国境の島・対馬の魅力　観光プロモーション

14:15~16:30　パネルディスカッション
日本初の国境観光 ―対馬モデルの可能性を考える
[コーディネーター] 薮野 祐三（国境地域研究センター 理事長）
[パネリスト] 財部 能成（対馬市 市長／JIBSN 代表幹事）
川口　史（JR九州高速船(株) 代表取締役社長）
伊豆 芳人（ANAセールス(株) 常勤顧問）
川口 幹子（(一社) MIT 専務理事／主任研究員）
江口　栄（(一社) 対馬観光物産協会 会長）

参加無料
定員100名

会場
電気ビル共創館3F
カンファレンスC
（福岡市中央区渡辺通2-1-82）

申込・問合せ先：(公財)九州経済調査協会　調査研究部（担当：横寺、島田）
TEL 092(721)4905　FAX 092(721)4904
(このチラシ裏面の申込書をご利用ください)

[主催] 境界地域研究ネットワークJAPAN（JIBSN）特定非営利活動法人国境地域研究センター
北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター（境界研究ユニット）
[協力] 対馬市　九州経済調査協会　九州大学アジア太平洋未来研究センター
九州大学持続可能な社会のための決断科学センター
[後援] JR九州高速船　ANAセールス　長崎新聞社　西日本新聞社　テレビ西日本

No.8　2014 年 10 月 31 日

よりあい処つしま（博多駅前 2-12-1：092-473-1075）

BORDER TOURISM

国境観光のロゴも誕生しました

＊本レポートは、日本学術振興会・実社会対応プログラム「国境観光：地域を創るボーダースタディーズ」の成果の一部である。

JIBSNレポート No. 8

「日本初の国境観光：対馬モデルの可能性を考える」

編集者：古川浩司
協　力：岩下明裕
発行日：2014年10月31日
発行者：財部能成
発行所：JIBSN事務局（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター内）
〒060-0809　札幌市北区北9条西7丁目
Tel. 011-706-2382　Fax. 011-706-4952
http://src-hokudai-ac.jp/jibsn/